



元気にマジメに笑顔をつなぐ

あゆみだよい

2016年10月28日発行
No.205



落合南長崎駅から徒歩2分ほどにあるこのお店、誰が見ても小さな布団屋さん。ところが、お店の看板には『黒と白・木版画』と大きく書かれています。でもアトリエや画廊には見えないお店ですが、ここは“地域のお宝”的のお店なのです。



店に入ると壁一面に版画が並び、その狭間に遠慮がちに布団や寝具が申し訳なさそうに並んでいます。

店主は、岩崎浩三さんで父親の代からの布団屋ですが、岩崎さんにはもうひとつの顔があり版画で有名な棟方志功とも縁のある版画家です。だから作品が展示され、ここで版画を地域の方に教えているそうです。



わが街のお宝… 不思議なお店

お店に展示された作品はどれをとっても傑作ぞろいですが、岩崎さんのお人柄や足跡もそれに劣らぬ素敵です。詳しくは5ページ『我が街・落合』の記事をご覧ください。



岩崎浩三「わが町西落合」より



第7回 落合つながるカフェ

福祉避難所は、どうなっているのか？



阪神淡路、東日本、熊本、3つの大震災の経験を経て福祉避難所はどこまで進化したのか？

そんな疑問から保護者と職員に“福祉避難所”についてアンケート調査をしました。その結果をもとに6月24日に第7回『落合つながるカフェ』を開催しました。

全国的に見ると新聞報道では全国の区市町村で45%の自治体が様々な福祉施設を福祉避難所に指定しています。熊本市でも協定の締結はかなり進んでいたということですが、実際の被災時にどの程度の避難所がその役割を果たすことができたのかを見ると…

福祉避難所の開設	
市の想定数：176ヶ所	実際の開設数：73ヶ所
避難者の受け入れ人数	
市の想定：1700人	実際の受け入れ：366人

熊本市は想定を大きく下回った原因を「想定以上の大災害で、施設自体が損壊したり、職員も被災して出勤できなかつたため」と説明していました。

あゆみの家の職員は、福祉避難所をどのように考えているのか。大震災時に職員の初動はどうなのか、調査で聞きました。『カフェ』では、初めに被災時の職員の駆けつけについて最も多かった回答を予想してもらいました。職員の年齢構成は20～30歳代が4割、40歳代が4割です。

- ① 同居家族もいないのですぐに駆けつけて避難所立ち上げに従事できる。
- ② 同居家族の安否確認や避難場所が決まり次第駆けつけて従事できる。
- ③ 要支援（育児や介護）の家族がいるので1日、2日は従事できないと思う。
- ④ 区外在住なのですぐに駆けつけることができないので公共交通が復旧したら従事できると思う。
- ⑤ どうするかわからない。特に考えていない。

直ぐに駆けつけるという回答は4名、他はほぼ同数で②が11名、③が10名、④は11名でした。

職員が勤務時間中の被災なら早い時期に対応可能ですが、休日や勤務時間外の場合には、何人集まることができてどの程度のことができるのか、その時になってみてないと分からぬというのが実情です。

ところで新宿区には福祉避難所でないと対応が難しいと思われる障害者は何人くらいいるでしょうか。身体障害や知的障害で重度・重症と言われる1級や1度の人は…

身体障害1級	知的障害1度	合計
3651名	69名	3720人

これらの障害者は日常的に介護が必要なので主な介護者の母親や配偶者と一緒に避難するとなり、全員を保護すると約7000人になります。現在、区内で障害者向けの福祉避難所は5ヶ所で収容数は350～400人と想定されているので、甚大な被害があった場合には、受け入れ態勢を整備できても保護できるのは、全体の1割程度です。

職員も被災して避難所運営に必要な人数を確保できない場合は、どうしたらいいのか？

『カフェ』では、あゆみの職員がどう考えているのか最も多かった回答を予想してもらいました。

- ① 避難してきた利用者の親、兄弟等家族の協力を得る。
- ② 地域の町会役員、民生委員など地域福祉関係者の協力を得る。
- ③ 区の災害ボランティアセンターの協力を得る。
- ④ 地域の福祉施設の相互協力で対処する。
- ⑤ どうしたらいいのかわからない。考えたことがない。

回答者の約7割が、①の親、兄弟の協力と回答しました。次に多かったのは、約5割の地域の町会役員や民生委員という回答でした。

大災害が発生すると施設は本来の機能を停止して福祉避難所として使用され、要援護者の支援を行うことになります。あゆみの家の場合、支援する要援護者は重度の身体障害者及び知的障害者になりますが、それは現在の施設利用



者に限定されません。

そこで、『カフェ』では、近隣に住むあゆみの家の利用者以外の方が避難してきたら、どんな対応になるかという質問について、最も多かった回答も予想してもらいました。

- ① 収容人数や備蓄に制約があるので、障害者福祉サービスを利用している障害者に限るべきだ。
- ② 他では避難生活が困難で、特別なニーズのある方については可能な限り受け入れをすべきだ。
- ③ 初めから線引きをするのではなく他の福祉避難所との連携関係を構築して柔軟に対応すべき。
- ④ あゆみの家の利用者も他の施設でお世話になるからお互い様《共助》の考え方で可能な限り受入すべき。
- ⑤ どうしたらしいのかわからない。

約6割の職員が③の「始めから線引きするのではなく…柔軟に対応」、次は、④の「お互い様で…可能な限り受入」という回答でした。この前向きな対応を可能にするのは避難所のマンパワー、職員のチームワークと保護者や地域の人達との信頼関係、協力関係ですが、いずれも即席でできることではなく日頃の取り組みや関係づくりが大切です。

保護者は、避難所をどう考えているか？被災したら真っ先に避難所に駆け込みますか？

現在、あゆみの家に通所している利用者は40名ですが、徒歩30分圏内に在住している人は5名です。被災により自宅での生活が難しくなったらどうするつもりなのか？保護者アンケートで聞きました。そこで『カフェ』でどんな回答が多かった予想してもらいました。

- ① どんなに不安、不便でも自宅で何とかがんばる。
- ② とても不安、不便なので近くの一次避難所（小学校や中学校）に避難する。
- ③ 最寄りの福祉避難所に避難する。
- ④ どうするかわからない。特に考えていない。

約半数の保護者が、①の「自宅でがんばる」と回答しました。2番目は約3割で②の「一次避難所」でした。「最寄りの福祉避難所」と答えたのはわずか3名で避難先はあゆみの家でした。なぜ、こんな結果になったのか？

例えば、「最寄りの福祉避難所がどこか知っていますか？」と聞いたところ「知っている」という回答者は半数でした。半数は知らないわけですから逃げるとしても一次避難所になります。さらに障害程度が重度になるほど特別な配慮の度合いが高くなり、一次避難所にそれを期待することはできないとか、福祉避難所であってもどこでもいいわけではない、といった事情があって「一次」であれ「福祉」であれ避難所への避難を初めからあきらめている保護者がとても多いです。集合住宅に住む場合は「エレベーターが止まったら自宅にいるしかない」という方もいます。災害時の要援護者名簿への登録者が障害者の場合、2割台で低迷しているのも同じ事情です。

職員向け調査では「福祉避難所の運営で不安な点」についても聞いているので『カフェ』の最後にその点を取り上げました。調査では予想される困難や不安について10項目を例示しましたが、うち4項目で9割の職員が、そこが不安と回答しました。それは…

- ① 施設の職員以外の支援者が見つからずマンパワー不足に陥ってしまうこと。
- ② 体調不良や感染症対策、救急医療との連携等、避難者の健康管理が十分にできるか不安。
- ③ 給排水設備の不良による洗髪、清拭、食器洗浄、トイレの汚物処理など衛生面での不安。
- ④ 停電で人工呼吸器や吸痰器等、医療機器の電源確保が困難になってしまうこと。

当日は『カフェ』の終了時間の頃に緊急館内放送が流れました。「訓練放送です。ただ今から地震を想定した避難訓練を開始します…」ということで、カフェ参加者も災害ボランティアになってこの訓練に参加しましたが、そこでも様々な発見や気づきがありました。

例えば、災害時の備品で重度障害者に使えない物がある。（組立式の仮設トイレは重度障害者には使えない。避難用担架は安全操作に不安あり等）。また、分散して保管している備蓄機材や備品の、保管場所や数量、使用方法を熟知している職員が1、2名しかいない。機器のメンテナンス、を行っていない、複数の職員が操作できる状態になっていない。一次避難所との連絡や連携方法（避難者の選考や移送方法）について何も決まっていない…等々。

白と黒の不思議なお店

我が街、落合 ⑯



「黒と白」のご主人

岩崎浩三さんは、西落合生まれです。西落合一丁目で 25 歳の時から父の代から続いている稼業の布団屋を 46 年間営んでいます。店内に版画を展示しているのは、家業と自分の生きがい、趣味を両立させたいと思ったからだそうです。お店は昭和 3 年建造、築後 88 年経つ古い建物で、猫地蔵で有名な自性院のすぐ隣ですが、戦時中この辺りは空襲の被害にあい自性院本堂も焼けました。また、近郊の日白文化村も空襲で大きな被害を受けました。

岩崎さんと版画の出会いは 36 歳の時、新宿区の美術講座で秋元清弘先生からデッサン、水彩画、油絵のご指導を受けるようになりました。年賀状を木版画で制作し面白くなりのめり込んでいきました。秋元先生が亡くなるまで 17 年間のご指導を受けました。先生の作品は力強く、明るい表現でした。尊敬する先生に

導かれて、岩崎さんは版画と水彩画の両方を描いています。



もうひとりの恩師

岩崎さんが大きな影響を受けた先生がもうひとりいます。上の版画に描かれている平塚運一先生です。平塚先生は、版画家・棟方志功が師とあおぐ方で、102 歳まで活躍した版画界の大家です。アメリカから帰国した時に 5、6 回ほど直接お会いしており、先生が 100 歳の時に岩崎さんがこの版画を彫りとても喜んだそうです。

日本の伝統文化

上の写真が岩崎さんご本人ですが、すぐ右にある作品は建て替えされる

前の銀座の歌舞伎座です。多くの車の往来で建物全体が見えないので何度も足を運んで道路の向かい側に立って描いたそうです。

この絵は空と影の部分に、浮世絵でも使われる江戸時代から伝わる 3 色摺りの「金きら摺り」の技法を使っています。それによって明るい空の感じを鮮明に表現した作品になりました。この作品は、ロシアのウラジオストック連邦大学にも寄贈されました。

岩崎さんは 11 年前に脳梗塞になり入院しました。入院しても創作意欲は一向に衰ええず、色鉛筆を使いその日その日に出された病院食の絵を描きました。入院して 3 日目から描き始めました。入院して 3 日目から描き始めて 1 週間後にある程度まで回復しました。退院するまで 3 食毎日描き続けたそうです。最初は麻痺して上手く書けなかったですが、毎日回復している様子が作品からもうかがえます。

【平塚 運一】明治 28 年島根県松江市生まれ、19 歳の時に画家をめざして上京。彫師の伊上凡舟に入門して版画の技法を習得。昭和 37 年に渡米して個展を開くとともに版画の普及に努める。病気で日本に帰国後も版画の普及に努め、棟方志功、菊池隆知など日本を代表する版画家を育てた。

【棟方 志功】明治 36 年青森市生まれ、小学校卒で青森地方裁判所の給仕をしながら油絵を描き、ゴッホに心酔。大正 14 年に上京して平塚運一、川上澄生の影響を受けて木版画に進み、独自の世界を築く。自由奔放な作風で版画の大衆化や普及に大きな足跡を残した。

常食



“百聞は一見に如かず”、その経緯の詳細は機会あればお店に立ち寄ってご主人にお話を伺ったり、作品の実物を見て確かめて下さい。

最後に岩崎さんの創作への思いをお聞きしました。いわく…「秋元先生のいつも言われる『再現ではなく表現、対象とひとつとなりきる』ということを心に刻んで、一彫り、一彫り心を込めて制作してきました。先生の絵に対する厳しさ、真正面から取り組む生き方に接して、一步でも近づければと思います。目標に向かって信念を持って努力すれば、必ず望みは達えられることをふたりの先生や版画を通じて出会った皆さんに教えていただき、本当に感謝の思いでいっぱいです。」

わが町、西落合

岩崎さんは、西落合地区の風景の変遷を様々な水彩画、版画に収めており、店内にいると昭和の良き時代に戻ったような癒し気分に浸ることができます。



【目白文化村】 大正から昭和にかけて存在した東京の代表的な高級住宅街の愛称。フランスのパリの街作りを模した田園調布に対してアメリカのビバリーヒルズの街作りに倣ったのが目白文化村。大正11年、下落合一帯の畠地や雑木林、原っぱだった田園地帯が開発されて高額で分譲され、高級な洋風住宅が並んだ。街の中には住民によるサークル活動や演奏会、映画上映会ができるクラブハウスを始めテニスコートや野球場、簡易スキー場まであって、当時としては類を見ないハイカラなコミュニティーカ形成された。



また、直接岩崎さんのお話を聞くことができると目白文化村含め落合地区の様々な文化や歴史のエピソードも聞くことができて、自然とこの町が好きになってしまいます。我が街、落合のお宝、不思議な「黒と白」の世界をお近くに来る機会があったら、是非、触れてみて下さい。

あゆみの四季



流しそうめん。箸ですくうのは難しかったけど楽しかった。



水遊び。楽しい夏のひとときに、思わず笑顔がほころびます。



夏だサンサン・全員集合だ～



思いっきり力を込めて～！そーれ！

生涯現役！

84歳のボランティア。

プール・ボランティアとして長年お世話になっている岡野元昭さんは、84歳の現役のボランティアです。その元気の秘訣をお聞きしました。



鮮烈な戦争の記憶

私は、銀行を定年退職した後に社会福祉協議会にボランティア登録をしました。最初の仕事は24年前のあゆみ家の2泊3日の合宿でした。家の近くだから「お手伝いしましょう！」とあゆみの家へ行ったんですね。退職後は週5日、ボランティアをしていました。あゆみの家の他に国際医療センターや生活実習所の手伝いもしていました。

水泳は学生時代から選手でした。小学校4年の時に初めて区の大会に出ました。会社勤めになつても健保組合の都の代表になって全国大会に何回か出場しました。

子供の頃から泳ぐのは好きだったので、学童疎開で妹と山梨の母の実家に行きました。当時は南千住に住んでいて、今は廃校になった小学校に通っていました。当時小学校6年で中学受験のために疎開先から東京に上京した日が3月10日の東京大空襲の日でした。山梨には戦争の情報は全然入らず、立川で降りた時にいきなり怪我人や被災者が沢山いるのを見て、友達と「いったい何事が起きたんだ？」と思いました。父と姉は東京にいましたが、東京の

実家は丸焼けでしたね。実家にたどり着くまでは、あちこち行って随分迷いました。地下鉄の浅草駅で電車から降りる時になつたら、みんなが一斉に防空頭巾をかぶり始めました。地上に出ると松屋や周辺のビルが火を吹いていました。浅草では建物が残ったのは松屋だけでした。学校は受験に来ただけど焼けちゃって、入試はできませんでした。戦争がどんどん激しくなり再び山梨へ行き、山梨の学校を卒業しました。実家の近所の人の消息は全然わからなかつたです。数年後に同級生が集まろうということになつたけれど何人も集まらなかつたね。戦中は本当に色々と大変な思いをしました。

元気の秘訣といえば…

銀行は60歳の定年で退職して、その後は子会社で70歳まで働きました。今思えば、本当に夢のような時代でしたね。人間運が左右することがありますね。

ボランティアをやって良かったと思うことは利用者さんが喜んだときですね。少しでも楽しそうな様子を見ると「あ～やって良かったなあ」と心の底から思いますね。

健康の秘訣は好き嫌いなく食べること、暴飲暴食はしないこと、それから運動をすることが大事です。こうやって元気でいられるのは、世間に出て手伝いをしたり、積極的に社会に出ているのがいいんです。退職して酒ばかり飲むとアウトになります。酒飲んだりして、何もしないのが一番体に良くないです。

酒は嫌いではないんですけど、お手伝いの時間は酒を飲む訳にはいかないでしょ。これは自分の健康のためなんです。昔は、冬はスキーで夏は水泳と登山、子供を連れてよくテニスもしました。人と積極的に関わりを持つのが元気の秘訣ですね。



“禍福は糾う縄の如し”で、生死の狭間をくぐり抜けた幼少時代、高度経済成長期を支えた充実した三菱銀行員時代、そして今と激動の時代を生きた岡野さんの含蓄のある言葉には重みがあります。

ここに紹介したお話はお聞きしたお話全体からすると4分の1くらいです。ほんの少し垣間見た岡野さんの人生の数ページですが、その生き方は我々の指針となり、元気の秘訣、幸せのヒントを与えてくれると思いませんか。



ワールドフェスティバル

11月13日(日) AM10:30~PM2:30 実りの秋だ、みんなちがってワッハッハ…

主催・会場 新宿区立あゆみの家

新宿区西落合1-30-10 大江戸線・落合南長崎駅から徒歩7分
TEL 3953-1230 ※お車でのご来場はご遠慮ください。

